

10月26日、70回生を対象に、東北大学名誉教授・総長特命教授の野家啓一先生（一高OB19回生）による講演会「科学とサイエンスのあいだ」が開催された。



1. 概要

講演は6つの部分で構成されていた。それぞれの要約を示す。

<はじめに>

- ・アインシュタインの仕事は、知識の累積によってほかの人にでも可能なものだった。しかし、モーツァルトの仕事は本人の才能に依存するため、他の人にはできないものであった。したがって、2人のうちどちらが偉大であるかといえば、それは後者の方である。

<「科学」は science にあらず>

- ・科学とはもともと理学（普遍的な原理についての知識）を意味したが、しだいに科学的な学問の分野の総称を示すためにも用いられるようになった。

<Newton は「科学者」にあらず>

- ・Newton の時代は、普遍的な原理についての知識の探求も哲学の一分野とみなされていた。
- ・科学革命を通して自然科学の方法が確立され、そのあと専門分野を扱う学問に分岐していった。

<科学技術と現代社会>

- ・社会的、政治的な科学の利用が始まってから、科学は好奇心を原点とするものから、社会的な目的を達成するための手段へと変化した。
- ・人文・社会的な解決も必要とする科学（トランス・サイエンス）が生まれてきた。

<リスク社会と科学技術倫理>

- ・科学技術によるリスクも生まれるようになった現代では、7世代の掟（世代をこえる問題の慎重な決定）の考え方が必要になっている。

<おわりに>

- ・現代社会では、文系の知識と理系の知識の両方を利用できる能力が重要になりつつある。

2. 生徒の感想

- ・モーツァルトとアインシュタインを比較したのは印象的だった。個人の才能よりも、知識の集積と理論的な思考を必要とする点では、科学は、人というよりは時間によって進歩するものだと思う。文系の知識と理系の知識は今日では相補的なものになりつつあるということ認識し、幅広い分野の理解に努めていきたいと感じた。
- ・一見同じである。いや、一見どころかどう考えても同じようにしか思えない。そう思っていたのだが、そもそも言語が違うからして意味が通じないのは当たり前かなとも思う。人間が物事の仕組みを説明するとき、もしいわゆる科学の知識がなかった場合、もう感覚や感情論でしか答えられないのだろう。まして、その現象がとても不思議であるならば、神霊の類のせいにするのもうなずけることだ。そう考えれば、自然哲学として精霊を出すのはもっともといえよう。それは昔の話ではあろう。ただ、今でも科学は問題を広い領域まで延ばしている。確かに、社会、政治あそこにもどこにでも関わってきている。
- ・今までは科学=サイエンスという認識だったが、サイエンスには日本語の「科学」という言葉には無い、多義的な意味があると分かった。最近はどんな事象にも「科学的根拠」や「科学的知見」が求められるが、科学は本来、専門的な共同体の中で発展してきたので、何でもかんでも素人が科学に助けを要求する風潮は非常によくないと思う。よって私達は科学に頼る部分とそうでない部分にしっかりと分け正しい判断をしないと「科学依存症」になり、よく分かりもしないで「科学」という言葉だけに惑わされ、それしか信用できなくなってしまうと思う。
- ・まず、「大先輩」という言葉にふさわしい人物だと感じた。70回生からも、このように大成する人物が生まれないだろうか、とわくわくさせられた。野家先生は、文系理系の枠組みにあまりこだわっていないようだった。学問を突き詰めていけば、双方の垣根は低くなる、とも仰っており、なかなか興味深かった。以前、私がお世話になった方も「今は文理の境界が曖昧になりつつある」と口癖のように仰っており、更には、文系と理系の橋渡し役の重要性も説いていた。文系だから、または、理系だから、という理由で制限されることがないような社会の実現が望まれているのだろう。私もその役割に少しでも貢献できる人材になりたいと改めて認識させられた。

3. 編集後記

今回の講演では、「科学」という学問について主題となっていたが、文理を問わず示唆に富む内容となっており、多くの生徒が興味を持てたのではないかと思われる。多面的な視点が重要になってくる今後の社会における、一高生の活躍を期待する。
(文責：2学年学術研究委員)

